2025年5月25日　説教「遣わされた弟子達」

ルカの福音書9章1～6節

8章の末尾は会堂管理者ヤイロの娘が、イエスの到着前に息をひきとったという報告で始まりました。イエスは家に入り、娘の手を取り、子どもよ。起きなさい、と叫ばれた。すると、娘の霊は戻り、彼女は立ち上がったのです。主の御力に両親は驚嘆しました。

１．力と権威とを授け（1～2）

①十二人を呼び集め（1）**「イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とをお授けになった。」**

9章は話が打って変わります。イエスの十二人の弟子達が集められます。12弟子とは、6章13節以下にあるように、ペテロ、兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブと熱心党員シモン、ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダです。その弟子達もガリラヤ伝道を主イエスと共にし、経験を積んできました。しかし、あのガリラヤ湖上では「あなたがたの信仰はどこにあるのか」（8:25）と諌められたこともありました。イエスは彼らを集めて、さらに大きなステップを踏ませようとなさいました。すなわち、彼らに第一に悪霊を追い出し、第二に病気を直す、力と権威をお授けになったのです。これは驚くべきことです。救い主イエスが持てる力と権威の一端を、その弟子達に授けられたのです。

②神の国を宣べるため（2）**「それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。」**

イエスはその上で、弟子達を宣教派遣されました。人々に神の国を宣べ伝えるためです。また、人々の病気を直すためです。その双方が、主からの権威を授けられたからこそできることです。そして、弟子達が将来において、使徒として立てられるための御訓練でもありました。遣わされるというのは、宣教地において具体的な問題に遭遇した時に、一定の判断や決断をする権限が授けられることでもありました。

２．何も持って行かない（3～4）

①旅のために（3）**「イエスはこう言われた。『旅のために何も持って行かないようにしなさい。杖も、袋も、パンも、金も、また下着も、二枚は、いりません。」**

イエスは弟子達を派遣するにあたって、かなり具体的な指示をなさいました。旅をするにあたって、さまざまなことが想定されます。服装はどうするか。履物はどうするか。日常生活に必要な物はどうするか。食糧の調達はどうするか。寝泊りはどうするか。怪我をした時はどうするか。病気をした時はどうするか等々、考えだしたら切りがありません。ところが、主イエスは言われるのです。歩く支えとなる杖も、必要具を入れる袋も、食糧であるパンも、お金も持ってはならず、さらには下着も二枚はいらないとまで言われるのでした。要するに、すべて必要は満たされると信じて旅に出なさいという

ことです。

②どんな家に入っても（4）**「どんな家に入っても、そこにとどまり、そこから次の旅にでかけなさい。」**

さらに伝道で家を訪問した時には、それがどんな家であっても、熱心に神の国の御言葉を伝え、その上にはそこに滞在しなさいというのです。かなり厚かましい感じがしますが、それぐらいの気概と熱意をもって、臨みなさいということでありましょう。そして、次の場所に移る時の起点をそのお宅にすることを心がけなさいとも言われるのです。

３．弟子達の宣教（**5～6 節**）

①人々が受け入れない場合（5）**「人々があなたがたを受け入れない場合は、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落しなさい。」**

弟子達エスが行く町においては、彼らを受け入れない場合もありましょう。そんな時に、その町を出て行くときに、足のちりを払い落しなさいというのです。ユダヤ人が異邦人の町を出る時に、そこでついたちりを払い落とすことをしていたのですが、彼ら対する抗議のしるしとして、そのようにしなさいと言われたのです。

②至る所で宣べ伝え（6）**「十二人は出かけて行って、村から村へと回りながら、至る所で福音を宣べ伝え、病気を直した。」**

こうした主イエスからの派遣の言葉を受けて、12 弟子達は出かけていきました。そして、村から村へと巡りました。そして、至る所において、神の国の福音を宣べ伝え、病気を直したのでした。福音とは「キリストが私たちの罪のために死に、葬られ、三日目によみがえられたこと」（Ｉコリント 15:3-4）です。まだ、キリストの十字架と復活を経験していなかった弟子達は、イエスがこれまでに教えられていたことを伝えていたのでしょう。具体的には神の愛と、新しく生まれること、そのために罪の悔い改めをすることを宣べていたと考えられます。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。「

第一は、弟子達に授けられた権威と力についてです。

ここで、弟子達は悪霊を追い出し、病気を直すための力と権威を授けられています。弟子達のなかに、ペテロやヤコブやヨハネのように、ヤイロの娘の回復の時にも特別にその場所に居させてもらった者たちもいます。しかし、なかには後に裏切ることになる、イスカリオテのユダも入っています。また、イエスの復活を疑ったトマスもいます。しかし、イエス・キリストは 12 人に共通の権威と力として、上記のような権威を与えておられるのです。これは、12 弟子が偉かったからではなく、選ばれた彼らの働きのための、特別の恵みなのです。ペテロですら様々な失敗をし、その極めつけはイエスが逮捕された時に三度もイエスを知らないと言ってしまったのです。旧約時代には、預言者、祭司、王などに油が注がれて、その働きを与えられました。新約時代には 12 弟子達やパウロなどに特別の権威と力を授けられたのです。それによって、教会はその働きの広がりのために用いられたのです。キリストの昇天後、聖霊の注ぎによって使徒たちは豊かに用いられるようになりますが、その後に続く歴史の教会、そして私たちの教会にも聖霊の力は注がれ、力が与えられていきます。弟子達へ権威と力が授けられたのはその準備でもあったのです。

第二に、何も持たずに行けとイエスが命ぜられた点についてです。

宣教の旅に出るにあたって、杖も袋も、パンも金も、下着も二枚はいらないというほどに、ともかく主に頼りきって行けといわれたのです。「神の国と神の義を第一に求めよ。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられる」（マタイ 6:33）というお言葉は、ここでも適用されるのです。これは弟子達への実践訓練でした。若い時代に東北でのワークキャンプに参加し、そこでこれに真似た実践がなされたことがあります。二人がペアとなって、出て行くのですが、お金、食べ物、水筒などは持たず、タオルは持ちましたが、暑い夏の陽差しのなか、田圃などがある所を歩き、家を訪ねて行きました。イエス・キリストのことを伝えるのですが、家の方も同情してくれてお茶を出してくれました。出されるとすぐに飲み干してしまうので、またついで下さるといった具合でした。一緒に歩いたマイヤーさんも顔を真っ赤にしていました。私たちは何軒か訪問した後、夜は野外球場のベンチで寝ることになりました。中には家に入れてもらって風呂に入ったり、泊めてもらう人たちもいました。イエスの言葉の実践はなかなか難しいと思うと共に、主の言葉を信じて実践するという清々しい気持ちもありました。イエスの弟子達へのご命令には宣教の基本があるのです。

第三に、弟子達への主の命令とパウロの宣教に関する確信の比較です。

パウロはコリント第一 9 章 16 節でこう述べています。「私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。私がどうしても、しなければならないからです。もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわいだ」。パウロは宣教者の生活が支えられる必要性を述べつつも、自らは教会やクリスチャンに支援を受けずとも宣べ伝えました。それは彼の使命だったからです。天幕作りをしながらでも、世界宣教に従事しました。今、イエス・キリストは 12 弟子を宣教に派遣するにあたって、全面的に主に頼って働くべきことを存在全体で学ばせようとしておられるのです。どんなにお腹を空かせることがあっても、必要は満たされると信じて進む訓練をしようとされているのです。その面では、この時代の弟子達へのご命令と、パウロの確信とは、和音を作っているのです。今年の私たちの教会の御言葉は「あすのための心配は無用です」（マタイ 6:34）です。教会の将来を心配する向きもあるかもしれません。しかし、今こそ主が示された弟子達へのお言葉と、パウロの精神を私たちの教会の宣教の心としていきましょう。将来にわたって、この地の宣教が続けられ、次の世代の伝道者をも迎えられる教会を目指して、進んで行こうではありませんか。